「活動の領域としての公共空間」の再検討

――アーレントの思想の社会学的可能性をめぐって――

立教大学　権安理

1　目的

この報告の目的は，一般的には政治思想・理論の分野に位置づけられるアーレントの思想を再考し，その社会学的な可能性を検証することである。周知のように，アーレントの眼目は，純粋な政治の領域としての公共空間を志向・思考することにあり，近代以降「社会的なるもの」が勃興する過程でそれが喪失したことを精緻に論証した。したがって，アーレントは社会に対して否定的であり，嫌悪すらしていたとの見解もある。だが，アーレントの思想における社会の可能性，もしくはその社会学的な可能性を考えることはできないのだろうか。

2　方法

アーレントの主著である *The Human Condition.*を主な対象とし，このテキストを再読するが，その際，以下のような二つのアプローチを取っている。第一に，アーレント自身の方法の独自性に注目する。アーレントは，古代ギリシアには存在した政治的領域としての公共空間が近代に至り，変容・喪失していった経緯を詳細に明らかにしたが，彼女の考察は経験的事実にのみ依拠している訳ではない。ハイデガーらの影響を受けた哲学的な方法に基づいたものでもある（権 2015; Walsh 2016）。この点に着目しながら，「労働／仕事／活動」区分と「社会的なるもの」の関係や，公共空間の存在根拠を問い直す。そして第二に，アーレントの思想と，現代社会学者の見解との接続を試みる。ここで依拠する見解は，オルデンバーグによるサードプレイス，すなわち「インフォーマルな公共生活」の領域に関する考察，主張である（Oldenburg 1989＝2013）。

3　結果

以上から，次の二点が明らかとなる。第一に，「労働／仕事／活動」という営為の区分が，アーレントが想定する領域区分と必然的に連動するものではない点である。したがって，例えば活動は，政治的な領域に限定される営為ではない。第二に，狭義の政治から解放された活動が展開する場の（現実的）存在根拠が，サードプレイス論に求められ得ると同時に，アーレントが言う公共空間が，サードプレイスと連続した地平で解釈し得ること，またそれゆえに活動の場となり得ることを示す。だが他方で第三に，公共空間は，単に“三つ目”というよりも，第一と第二の場が派生するような特異な空間＝space であることを示す。

4　結論

以上から，アーレントの思想，すなわちその公共空間論は，狭義の政治（学）から解放され，彼女の思想には社会（学）的な可能性があると考えられる。

文献

Arendt, Hannah, (1958)1998, *The Human Condition*, The University of Chicago Press.

権安理，2015，「『公共的なるもの』の概念と展開：アーレントの思想の再検討と，戦後日本における『公共的なるもの』の変容」，早稲田大学審査学位論文（博士），早稲田大学大学院社会科学研究科.

Oldenburg, Ray, 1989, *The Great Good Place: Cafés, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*. Da Capo Press.（＝忠平美幸訳，2013，『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房.）

Walsh, Philip, 2016, *Arendt Contra Sociology: Theory, Society, and its Science*, Routledge.